



TITLE:

第1章 1996年度京都大学構内遺跡調査の概要

AUTHOR(S):

山中, 一郎; 清水, 芳裕; 伊藤, 淳史

CITATION:

山中, 一郎 ...[et al]. 第1章 1996年度京都大学構内遺跡調査の概要. 京都大学構内遺跡調査研究年報 2000, 1996: 1-2

ISSUE DATE:

2000-08-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/226716>

RIGHT:

第1章 1996年度京都大学構内遺跡調査の概要

山中一郎 清水芳裕 伊藤淳史

1 調査の経過

京都大学埋蔵文化財研究センターでは、吉田キャンパス及び附属施設での建物新営やその他掘削工事に際して、予定地の埋蔵文化財調査を、発掘、試掘、立合に分けて実施している。1996年度には、以下の発掘調査2件、立合調査4件、資料整理3件を実施した。

- | | | |
|------|------------------------------------|---------------|
| 発掘調査 | 放射性同位元素総合センター新営予定地（医学部構内A N20区） | （第4章，図版1-248） |
| | 総合人間学部校舎新営予定地その2（総合人間学部構内A R24区） | （発掘中，図版1-249） |
| 立合調査 | 工学部物理系校舎第3期新営予定地（本部構内A U28区） | （図版1-250） |
| | 人文科学研究所附属東洋学文献センター改修工事（北白川小倉町） | （第1章，表8-251） |
| | 法・経済学部本館屋外排水管布設工事（本部構内A V25区） | （第1章，図版1-252） |
| | 文学部研究棟新営工事（本部構内A X26区） | （図版1-253） |
| 資料整理 | 総合人間学部校舎新営予定地（総合人間学部構内A R25区） | （第2章，図版1-238） |
| | 病院地区外来診察施設棟新営予定地（病院構内A G20区） | （第3章，図版1-239） |
| | 病院地区MR I - C T装置棟新営予定地（病院構内A F20区） | （第3章，図版1-240） |

2 調査の成果

前節で掲げた調査のうち、1996年度に整理を終えたものについて、その成果を略述する。なお、総合人間学部構内A R25区、病院構内A G20・A F20区、医学部構内A N20区の発掘調査については、それぞれ第2章～第4章でも詳述している。

縄文・弥生時代の遺跡 これまで縄文・弥生時代に関する情報に乏しかった医学部・病院構内でも、多くの成果が得られている。病院構内A G20・A F20区の調査では、流路内より、縄文後期北白川上層式2期の土器が、比較的まとまって出土した。また、医学部構内A N20区では、縄文前期以前とみられる流路から木材や種実類が、基盤のシルト層や不定形土坑の埋土から縄文前期～弥生中期までの土器が、それぞれ出土している。このほか総合人間学部構内A R25区で、弥生前期末のまとまった土器資料と、壺棺墓の可能性が高い遺構がみつまっている点も特筆される。

古墳時代の遺跡 総合人間学部構内A R25区で、微量ながら形象埴輪や須恵器が出土した。埴輪の出土は南方約150mのA O22区に次いで2件目であり、周辺に埴輪を伴う古墳が存在している可能性がいっそう高まった。今後の調査に留意する必要がある。

古代の遺跡 総合人間学部構内A R25区で、奈良時代の土坑や土器溜、平安時代の溝群がみつまっている。奈良時代の資料は、これまで本部構内や総合人間学部構内で確認されてきたものと同時期の8世紀中葉に比定され、この時期の遺跡が、周辺一帯に面的な広がりをもっていたことが明瞭になった。また平安時代の溝群は、10・11世紀代に属するもので、うちひとつからは、これまで構内遺跡で少なかった11世紀前葉の土師器がまとまって出土し、土器編年を考える上で貴重な資料が得られた。

中世の遺跡 各調査区でそれぞれ成果が得られているが、とりわけ、総合人間学部構内A R25区における、直角に近いコーナー部分を有する室町時代の大溝が注目される。溝内からは、多種類の軒丸・軒平瓦や建築物に付属する飾金具をはじめとした多量の遺物が出土しており、中世後半期の屋敷地や寺域の一画であった可能性が高い。

近世の遺跡 病院構内A G20・A F20区一帯は、旧聖護院村の北辺にあたり、今回の発掘調査によっても、近世の生活史をものがたる多様な情報が得られた。なかでも特異な遺物として、近世後半の池とその周辺からまとまって出土した埴塙があり、植木鉢などに加工転用するために集められた可能性が推測されている。また、幕末の歌人大田垣蓮月の手になる蓮月焼も大量に出土し、西側の141地点出土の資料と合わせて、蓮月焼の実態解明に重要な資料が追加できた。このほか大溝群からは、これまで構内遺跡ではみられなかった17世紀の土師器や陶磁器類が一括出土し、編年の空白を埋める貴重な成果となった。一方、総合人間学部構内A R25区では、中世後半期以降存続していた北から南および東から西へと下る落差の大きな段差と、耕作関連の無数の柵列や野壺群がみつまっている。近代の大学設置にともなう造成により平坦地化されるまで、段々畑のつらなるのどかな農村的景観が広がっていた様子を具体的に知ることができた。

立合調査の成果 本部構内時計台北側の252地点の調査では、表土下のごく浅いレベルで、縄文土器の細片を含む厚い遺物包含層の存在が確認された。本部構内の随所に先史時代の遺物包含層が存在し、それがかなりの起伏をもっていたことを示す注目すべき成果といえよう。また、北白川小倉町地内の人文科学研究所敷地内の調査では、時期不明の包含層の確認にとどまった。一帯は、縄文前期を主体とする北白川小倉町遺跡として周知されているが、不明な点も多く、今後より詳細な調査を実施する必要がある。